

上出洋介

アメリカ人が日本語で書いたベストセラー「日本人の英語」(Mark Petersen 著: 岩波書店)によると、日本人科学者の英文論文のレベルは、この何十年間ほとんど進歩していないとのこと。そのレベルは、“She boarded the subway in Shibuya.”という英文を「彼女は地下鉄を渋谷に乗りました」という日本語に翻訳しているような程度だという。つまり、私たちはこの日本文を見てすぐにヘンと思うだろうが、私たちの書いている英語は、英語人にとってはこのレベルであるという指摘を受けていることになる。最近出版された日本人の論文の最初の文(最初の1文だけ!)が正しかったのは、わずか26%しかないということまで示されている。

さて、論文・学会講演集・研究費申請書・研究報告書・研究所紹介と、私たちには書かねばならないことが沢山ある。教官・技官だけではなく、事務官はもちろん、秘書たちにも、毎日毎日書く書類が回ってくる。本稿でいいたいことは、日本人だからといって正しい日本語が書けるとは限らないということである。

世の中には、意味の通じない日本語が蔓延している。研究所の中も決して例外ではない。たとえば、「私は日本人だから、日本語ぐらい書けますよ」と叱られそうな気がする。しかし、本当にそうですか。ひょっとして、「渋谷に乗りました」程度の日本文を書いているのではないだろうか。科学研究費申請書の日本語の意味が通じないために、不採択になっていることをご存じだろうか。昨年12月、名大で開催された講演会「21世紀の学術と大学」で、理学研究科の野依良治教授は「名大は明日の競争時代を生き抜けるか」の中で、「名大の教官でまともな日本語を書ける教官は20%もいない」と明言された。

もちろん、私たちは文筆家ではないから、名文をすらすらと書けなくてもよい。しかし、最低、読み手にわかる日本語を書かなければ用事が足りない。日本語の書き方については、金田一春彦「新日本語論」、清水幾太郎「論文の書き方」、丸谷オー「日本語のために」など数多くのポピュラー書があるが、1982年の初版以来百万部は出ていると思われる本多勝一著「日本語の作文技術」と、その続編「実践・日本語の作文技術」を読むことをお薦めしたい。技術である以上、誰にでも学習可能である。日本語を話すときと書くときでは、脳ミソの違う場所が使われているらしい。清水幾太郎氏は、「日本文を書くときには、日本語を外国語として取り扱わなければならない」とまで書いている。

ここでは、自分の書いた文を改良するごくごく簡単な2つの点について述べよう。これらに注意することにより、今すぐ50%以上の人の文が50%以上わかりやすくなるはず。

(1) テン(読点)の全くない、数行にもわたる長文が、研究所内を徘徊しているのを見受ける。研究者は勝手な人の集団だから、おそらく自分にだけテン(句切り点、息次ぎ箇所)

が見えるのだろう。私はこのような人たちの共通点として、「自分勝手、怒りっぽい」性格とひそかに思っている。「日本語の作文技術」から、テンなしの悪文の例をひとつ： A 刑事は血まみれになって逃げ出した犯人を追いかけた。

(2) 修飾する語をされる語の近くにおかなければ、意味が通じないばかりか、ときには誤解される。こんなことは当り前のことであり、他人の書いた文章ではすぐ「ヘンな日本語」と気づくのだが、自分のことになると甘くなるようだ。上記書から悪文の例 1： 速くライトを消して止まらずに走りましょう。例 2： 私は、A が B が C が死んだ現場にいたと証言したのかと思った。原則は英語でも同じで、It is noticed during a magnetic storm that substorms occurred frequently. はペケ。

これら 2 点は、自分の書いた文を見直してみるとすぐ分かることですから、他人に迷惑をかけない文を書く一番簡単なチェック法でしょう。（ちょっとおかしいこの日本語は、次レベルの修正を必要とする）最近皆さんが書いた文章（とくに外部に見せる文）を見直し、そしてまだ印刷されていなければ、修正することを奨めます。新幹線で、「次の停車駅は名古屋に止ります」というアナウンスを聞いたことがある人も多いことと思います。